特集

沖縄のくらし

「日本の文化」展示のなかに、あらたに設けられた「沖縄のくらし」セクション。琉球王国の時代や、第二次世界大戦後のアメリカによる統治、そして一九七二年の日本への復帰という、歴史的な転換期を乗り越え育んできた、沖縄の独特で多様な文化を紹介する。

本土の沖縄展示
——民博と海外移住資料館を見て

安里進（あさとすすむ）　沖縄県立博物館・美術館長

多角的な「沖縄のくらし」

「戦後のくらし」展示がとても新鮮だった。とくに照屋林助の「ワタブーショウ」のポスターが印象に残っている。三〇年ぶりの本館東アジア展示リニューアルにあわせた「沖縄のくらし」展示のオープニングセレモニーに招かれたときの感想だ。

民博の沖縄展示は、これまで、日本展示のなかでの部分的な紹介だったという。これが今回は、日本文化展示のなかに一角を設けて「沖縄のくらし」を紹介する充実ぶりだ。島々の多様性という視点のもとに、人びとのくらしをモノや映像で紹介している。そして、最後に「戦後のくらし」の展示がある。

ジュークボックス、冒頭に紹介した「ワタブーショウ」のポスター、エイサー衣装、かりゆしウェアー、高校野球で全国制覇を果たした沖縄尚学や興南高校のユニホームなどが賑（にぎ）やかにレイアウトされている。「戦後のくらし」展示を担当した沖縄出身の呉屋淳子機関研究員は日本復帰後世代だが、琉球政府時代の雰囲気もじつによくつかんでいる。

ところで、今回の展示リニューアルは、米軍基地や歴史教科書をめぐって沖縄と本土の溝が深まるなかで進められてきた。民博のみなさんが沖縄の現状を受けとめ、民博ならではの方法で沖縄を紹介し理解を深めることに尽力していることが伝わってくる。

「沖縄のくらし」内、「戦後のくらし」展示

しかし、沖縄の歴史を研究してきた者からみれば、今回の展示にもまだ違和感はある。五〇〇年におよぶ独立国家の歴史と独自の言語・文化をもち、自らを琉球人と自覚してきた人たちの伝統文化が、日本文化のなかで扱われることへの違和感だ。これは沖縄側にも原因がある。本土と沖縄双方の研究者が議論し克服すべき課題だと思う。

世界のウチナーンチュ移民

民博見学の後、ＪＩＣＡ横浜の海外移住資料館で「雄飛——沖縄移民の歴史と世界のウチナーンチュ」展を見る機会があった。民博では、「多みんぞくニホン」展示で、日本にくらす大勢の外国人との融和を打ち出しているが、海外移住資料館は「われら新世界に参画す」という大テーマを掲げて、移住先の国で新しい文明づくりに参加する日本人の姿を紹介している。このふたつの展示施設は、移住し交流するという人類の普遍的な営みのなかで日本人や日本社会をとらえようとしている。外国人へのヘイトスピーチや領土問題で排外的な空気が広がりつつあるこの国で、ふたつの展示館が果たす役割はとても大きいと感じた。

民博と海外移住資料館の沖縄展示は、こうした広い視野の展示のなかで紹介されている。その意味で、沖縄の博物館や資料館ではなかなか学ぶことができないものがある。海外移住資料館の展示には、民博の先生方も関わっている。沖縄に住むわたしたちとは異なる視点と視野から、沖縄を客観化してわかりやすい展示で紹介する努力が本土側でおこなわれていることの意義は大きいと思う。

JICA横浜の海外移住資料館で開催された
「雄飛——沖縄移民の歴史と世界のウチナーンチュ」展

泡盛と古酒文化

萩尾 俊章　沖縄県教育庁文化財課副参事兼班長

口噛み酒から蒸留酒へ

沖縄の泡盛は今ではよく知られた代表的な蒸留酒である。泡盛が普及する以前の伝統的な酒は何かというと、「口噛み酒」であった。年中行事の主要な祭りに際しては、米を用いた口噛み酒が盛んに作られ供されていた。この伝統は歴史的な記録からは一五世紀から確認でき、一部の地域では戦後まで存続していた。

泡盛の源流となる蒸留酒が琉球王国に伝来したのは、一五世紀後半と推定されている。近世において、王府は首里三箇の酒屋において泡盛製造を統制管理し、泡盛は対外的にも献上できるレベルにまで向上する。泡盛は中国からの冊封使の接待に用いられるとともに、琉球使節が江戸に赴いた際には将軍に献上され、御三家や幕府の要人へも進呈された。江戸においては琉球の泡盛は上質で、薬効があるとされ、貴重品として人気があったことが諸記録にみえる。近代以降、泡盛は沖縄の主要な産業のひとつとして成長していく。

呉須差抱瓶
制作者：小橋川源慶
地域：沖縄県 那覇市
沖縄県立博物館・美術館蔵
みんぱくの「沖縄のくらし」で展示中

多彩な古酒づくり

さて、泡盛の大きな特徴は、長くねかせ、熟成させることで酒質が向上するところにある。つまり、より味わい深い、おいしい酒になるのである。現在、泡盛は製造してから三年以上ねかせたものをクース（古酒）とよんでいる。

かつて首里城には「康熙年間」の古酒があったと伝えられる。康熙とは中国の年号で、西暦の一六六二～一七二二年にあたる。ということは、二〇〇年以上経た古酒が育まれていたことになる。一七世紀後半の時代は倹約政策が進められたことにより、酒を貯蔵する風が始まったとも推察されている。これは王宮の特別な事象と思われるかもしれないが、そうでもなかった。昭和初期に沖縄を訪れ『泡盛醸造視察記』を著した大崎正雄は、「泡盛酒の最も古きものは二百年、百五十年は希にあらず」と記しており、首里の旧家でも長期保存の古酒が秘蔵され、「古酒文化」が息づいていたのである。

現代の泡盛は個性化の時代を迎えている。さまざまな趣向や技術を生かした銘柄の泡盛が市販されるとともに、泡盛の多彩な古酒づくりがグループや個人でも展開されている。

各種の泡盛や酒器、古酒を収集した酒倉（沖縄県うるま市　宮里栄徳氏宅）

「うろこ取り」について

大湾 ゆかり　沖縄県立博物館・美術館主任学芸員

うろこをごしごし

魚のうろこを取る道具のことを、沖縄では「イーキトゥイムヌ」とか「イリチウクサー」というようだ。一、二センチメートル厚の木の板に一寸釘を一五～二〇本ほど打ちつけた簡単な道具で、釘の先端の尖った部分を魚の背に当ててうろこを削ぎ落とすものである。

黒島のうろこ取り

かつては魚の行商をする女性たちが、たらいに魚と一緒にまな板、包丁、天秤、うろこ取り等を入れて市場へ行き、その場で魚の量り売りをしていた。道端でたらいを降ろし、まな板に乗せた魚のうろこをごしごし扱く姿は、どこの市場でもみられた光景であった。

そのうろこ取りだが、現在では市販のものが出回り、木製のものはあまり見かけない。だから今春、八重山の黒島で実際に手製のうろこ取りを使っている場面に遭遇したときにはじつに興奮した。たまたま今回の展示で沖縄県立博物館・美術館が所蔵する二点のうろこ取りのうち一点を貸し出すことになったので、余計に希少性を感じていたときであった。

手製の威力

うろこ取りにもいろんな形があるが、黒島のうろこ取りはまだまだ新しく、頭部が大きく持ち手が細い。釘も一寸釘ではなく「＋」ネジが使われている。これを作ったお爺さんが「ンズ（魚の意）」と言い、釣ってきたばかりの魚を庭先でさばいていた。お爺さんは手製のうろこ取りと市販のものを両方使っていたが、手製のうろこ取りの威力は抜群で、硬いうろこもあっという間にはじき飛ばされていく。見ていてまさに万能な道具だと感心した。

今回、国立民族学博物館の「沖縄のくらし」の展示に際し、沖縄県立博物館・美術館が貸し出した三三点の資料には、嘉瓶や抱瓶とよばれる酒瓶や碗などの陶器類、張り子の玩具等の工芸品が含まれる。また、銛や網、鍬、円箕などの大型の漁具や農具が数々ある。そのなかにあってこの素朴なうろこ取りという道具は、漁師の暮らしや魚市場でうろこを掻く勇ましい場面を想起させる貴重な資料になることであろう。

手製のうろこ取り
沖縄県立博物館・美術館蔵
みんぱくの「沖縄のくらし」で展示中

神女の衣装

小禄裕子　元宮古島市総合博物館学芸員

集落への降臨

宮古の各集落にみる神女の衣装は、藍色を基調にした絣模様の着物が一般的で、正装として木綿布で仕立てた白の神衣装を羽織る。今回、みんぱくの「沖縄のくらし」セクションで展示されている衣装は、宮古島の北端に位置する狩俣のウヤーンといわれる祭祀で着用された衣装を参考に仕立てたものである。

宮古で一般にアーグといわれる歌謡のなかのタービ、フサ、ピャーシ、ニーリという長編の神歌は年間祭祀の場で数多く歌われていた。その中心となるのが神女である。冬季におこなう一連の祭祀は別名ウヤガン（親神）と総称され、旧暦九月から一二月にかけて五回実施される。毎回、祖先神ウヤガンに扮した神女たちが、狩俣集落の西側（民間方位。実際は北側）に位置する聖林イズヌヤマ（西の山）のなかに入り、そこで数日間籠もって所定の儀礼を務めた後、集落へ降臨する。この降臨は数度にわたる場合もある。神女たちは集落へ降臨する際、その時間帯に合わせて苧麻衣や芭蕉衣の神衣装を身につけると、草冠を被り、腰にはつる草を帯として巻き、手に杖か、手草のいずれかを持つ。狩俣では、ウヤガンの生まれる根家の家柄に嫁いだ女性は、神衣装（祖神衣）として黒色衣、苧麻衣や芭蕉衣、木綿白衣、五色布などを受け継ぐが、儀礼によって選任された場合には個人で訛えなければならないという。本来、祖神衣は他者が触れるものではなく、継承者がいなければ、退任儀礼で役を解かれた神女とともに棺に納められる。

参考にされた衣装。宮古島市総合博物館蔵

みんぱくの「沖縄のくらし」で展示されている神女衣装の複製
H0275666、H0275667

再現の工夫

今回、参考にした神衣装は、苧麻衣、木綿無地の黒神衣、七本（五本）一組の五色布である。苧麻布で仕立てられた「ブーパニ」ともいわれる白神衣は、儀礼によって芭蕉衣と区別されて着用されたという。そのブーパニの白さに近づけるため苧麻糸は数回海水でさらした。また、宮古への高機の導入は記録では明治四一年とあるが、狩俣では昭和初期ごろまで地機が使用されていたと考えられるので、織機は丸太経巻き具を特徴とする宮古型地機を使用した。黒神衣には材質が複数あり、五色布とともにその当時手に入る布地を利用したと思われるが、かつては、濃紺（藍染め）苧麻布で仕立てたと考えられる。

なお、時代の推移に伴い宮古でも祭祀の中止や変容が多くみられ、現在は、人びとの祭祀生活全般についての情報を得ることが困難な状況になってきている。

狩俣のウヤガン（輪舞）

石垣島のソーロン（盆）
――四カ字を中心に

大濵憲二　石垣市立八重山博物館館長補佐

祖霊をなぐさめる

〝ソーロンガナシヌウシュマイダー　ショッコーシラリナオッタネー　ショッコーシーオイサーバ　トゥーサンナーサンカリィヒョーリ〟これは、盆でおこなわれる新川地区のアンガマ道行の節で、祖霊がおいでになったので焼香してあげましょうという内容である。

盆の三日間、石垣島四カ字を中心にアンガマがおこなわれる。アンガマは、ウシュマイ（翁）とンミー（媼）が、ファーマー（子）（孫）を連れてグショー（後生）から訪れ、地域を練り歩き、招かれた家々の祖霊を慰めるものである。ウシュマイやンミーの裏声での機知に富んだ問答が特徴的で、ファーマーが演じる踊りも芸能の島と称されるにふさわしく多彩である。

新川字会の獅子祀りは、他の地域とは異なり、送日の昼、新築の家でおこなわれることが多い。字会役員や地域の古老などが集まって、地域の邪気払いと字民の健康を願う

アンガマは、盆の三日間、招かれた家々の祖霊を慰める。招かれた家で、後ろに控えるファーマー（子）（孫）の歌・三線でウシュマイ（翁）とンミー（媼）が舞っているところ

市場はソーロン景気

沖縄の盆は、七月一三～一五日の三日間おこなわれ、石垣島では、ンカイピン、ツカシピン（迎日）、ナカヌピン、チュウニチ（中日）、ウクリピン（送日）などとよぶ。

盆が近づくと、市場は今も昔も「ソーロン景気」のごとく活気をみせ、女性たちは盆飾りや供物用の材料を準備し、男性たちは墓掃除をおこなう。このころから独特な空気が漂いはじめる。

迎日の夕方、墓へ出かけ祖霊を案内して来る。家の門前に束ねた稲わらの先を焼いて祖霊を迎え仏壇に招き入れる。早速、朝昼夕食や茶菓子などで送日までの三日間供応する。よって、女性たちは台所から離れられず多忙を極める。一方、男性たちは盆の三日間で親類縁者宅へ祖霊への焼香に出掛け、これまた大忙しである。

盆の三日間、仏壇は提灯や回り灯篭、山海物などで飾りつけられる。八重山蔵元の絵師が描いた仏壇の盆飾りに比べれば、近年の生活改善運動によってかなり質素になったものの、依然華やかな飾りつけである。

送日の夜は、家族そろって焼香し銭型を打ったウツンガミ（打紙）を焼き、午前〇時近くに門前で祖霊をお送りする。

親しみと怖れ

石垣島では、年に二度、祖霊とともに食事をとりながら時を過ごす。一月の十六日祭と七月の盆で、十六日祭には墓前に出向き、盆は家に招き入れる。いずれも祖霊との近さ、親しみの深さからくるもので、それが祖先崇拝の強さを感じさせる所以かもしれない。冒頭に紹介したアンガマでもいわば異界から訪れた存在にも関わらず、怖れることなくむしろ親しみを込めて接していることもその表れである。

反面、七月はソーロン月ともいい、祝い事を避けることや七月以外で歌うことを忌み嫌う古謡があるなど、やはり現世と後生を隔て、霊に対する畏怖の念は抱いている。

送日の翌日は、各地域で獅子祭りイタシキバラの行事がおこなわれ、獅子を舞わせて邪気や悪霊を追い払う。漂っていた独特な空気も消え、日々の生活に移っていく。

戦後沖縄と英語学校

呉屋 淳子　民博 機関研究員

米軍統治下の英語教育

戦後沖縄では、米軍統治という事情もあり英語教育を重視する風潮があった。戦後沖縄で展開した英語教育には、大別してふたつの目的があった。ひとつは、学校で英語教育をおこなうことができる教員の養成、もうひとつは、米軍基地内で「軍作業」に携わる人びとの実用英語の習得である。軍作業とは、米軍雇用労働のことをいい、事務をはじめ港湾・運送・道路・住宅の建設といった職種があった。当時の沖縄では、軍の物資を輸送するトラックの運転手は「花形職種」とよばれ、人気のある職種だった。

教員養成のための英語教育は、一九四六年に米軍政府によって設立された沖縄文教学校でおこなわれた。その後、米軍政府はより高度な英語教育をおこなうため、公立の外国語学校を設立した。これを皮切りに、一九五〇年四月までの約四年間で英語教師の他、翻訳・通訳官の育成をおこない、約七〇〇人余りの卒業生を輩出した。一九五一年、琉球政府立琉球大学が開学すると、英語教師の養成はすべて高等教育機関に移管された。

あのときはアメリカだらけ

一方で、実用英語を学ぶための英語学校は、一九五五年に沖縄県出身の三名の講師によってはじまった。高校卒業者を対象にした私立の英語学校では、一九七〇年ごろまで多くの卒業生を輩出し、その修了生の多くが軍作業に就いた。軍作業の経験のある六〇代後半の男性は、「あのときはアメリカだらけだったからね。とにかく軍で働けばいい稼ぎになるとみんなが思っていた時代だった」と語った。とはいえ、私立の英語学校に通うためには、当然まとまったお金が必要だった。学費や下宿代を工面するために、親戚からお金を借りる者や畑を売ったりする家も少なくなかったそうだ。

「戦後のくらし」では、戦後沖縄の様子を辿る資料として沖縄出身の講師によって設立された私立の英語学校、名護英語学校の写真パネルを展示した。戦後沖縄でもっとも重視された英語教育の変遷から、戦後をたくましく生きようとした人びとの息づかいを感じて欲しい。

英語を学ぶ学生とその講師。名護英語学校にて（提供・名護市教育委員会）

私立の英語学校。1963年ごろの名護英語学校（提供・名護市教育委員会）

沖縄スポーツのゆいまーる精神

仲本 兼進　スポーツライター・ラジオディレクター

誇りであり、魂である

「高校野球が始まると沖縄の経済はストップする」。それは決して大袈裟でもなく、郷土愛が織り成す一般的な事象である。大柄な男性がオフィスの片隅で携帯のワンセグ片手にソワソワすれば、県民の台所である市場の至るところで太鼓や指笛が鳴り響く。渋滞が当たり前の主要道路も閑散。その光景は県外の人から見れば異様なのかもしれないが、作業を止めてまで応援するという行為は県民としての誇りであり魂なのだ。そしてその応援は、チームに対してというよりもむしろ、沖縄県人だから応援するという意味合いが強い。たとえ対戦相手でも沖縄出身選手がいればその選手に拍手を送る。頑張っている姿を見ることが県民の心を強くさせているのだ。

団結心の象徴となっているバスケットボールチームの試合会場は、常に熱気を帯びている（提供・琉球ゴールデンキングス）

沖縄の象徴としてのスポーツ

戦後、沖縄は日本から切り離された経験をもつ。本土が主権を回復し経済状況も上向きになるなか、生活や産業活動の基礎となるインフラ整備もままならず交易も限られていた。本土復帰後も離島県だからこそのハンディキャップやネガティブな意識は当然存在する。そのため自立心は非常に強い。失われた時間を取り戻すため本土との差を埋めるべく懸命に努力を重ねた。その行為の結果が目に見えてあらわれるものの、ひとつが野球だったのだ。甲子園で躍動する選手の姿を見て県民が一体となり、明日への活力に繋げる。今日の応援スタイルは、ともに助け合い自分を捨てて人に情けをかけるという「ゆいまーる精神」なのだ。その精神は今なお根強く、沖縄スポーツの発展に重要なポイントとなっている。

二〇〇四年夏から二〇一四年春までの一〇年間で三度、全国制覇を果たした高校野球（〇八年春・沖縄尚学、一〇年春夏・興南）。プロバスケットボール「b.Jリーグ」の琉球ゴールデンキングスが三度の日本一。そしてサッカーのFC琉球は念願のJリーグ入りを果たした。選手、監督、そして一から基礎を作りあげ尽力した方々の熱意があったからこそ今日の結果へと繋がっているのだ。

県民は歴史的、地理的な苦難を結集することで乗り越えてきた自負がある。だからこそ沖縄を応援するのだ。その思いが続く限り沖縄のスポーツ界は更に発展していくことだろう。

目的意識をもって日々の練習に励む沖縄尚学の選手